

県独自の取組

## 4 全体会事例発表

【体験活動に関する施策・取組】

### びわ湖フローティングスクール事業

### 及び琵琶湖・淀川流域小学生交流航海事業

### 滋賀県教育委員会

#### 地域の概要（当事業開設当時の背景）

##### ○フローティングスクール誕生の初動機

我が国最大の湖をもつ滋賀県は、

①昭和44年から「滋賀青年の船」、昭和55年から「びわ湖少年の船」の各事業を毎年実施し、青少年の資質の向上とリーダー養成に大きな成果を上げてきた。

②昭和52年7月の小学校学習指導要領の改訂により、特別活動の目標に「望ましい集団生活を通して、心身の調和のとれた発達を図り、・・・」とされ、各校においても、青少年宿泊施設などを利用しての集団宿泊による野外活動が積極的に取り入れられるようになった。

③日本最大で世界でも3番目に古い琵琶湖は、高度成長と歩調を合わせるかのように汚染が進んだ。美しい碧い琵琶湖を取り戻そうと、昭和54年、「琵琶湖富栄養化防止条例」が制定された。

昭和57年3月、これらの実績に学び、今日的課題である青少年の健全育成をはかるため、学校教育の一環として、滋賀県で船を建造し、県下の小学生を乗せるという提案が県議会で審議され決定された。

##### ○ 連絡先

〒520-8577

滋賀県大津市京町4丁目1番1号

\*滋賀県教育委員会事務局学校教育課

電話:077-528-4576 fax:077-528-4953

〒520-0047

\*滋賀県大津市浜大津5丁目1-7

びわ湖フローティングスクール事務所

電話:077-524-8225 fax:077-524-8226

#### 体験活動の概要

（びわ湖フローティングスクール事業の概要）

##### ○船の学校、「琵琶湖に浮かぶ学校」

学校教育の一環として実施

##### ○学習船「うみのこ」

総トン数：928トン

長さ：65メートル

幅：12メートル

高さ：20メートル

喫水：1メートル

速度：8～9ノット

##### ○滋賀県内の小学5年生全員が乗船

公立・国立・私立小学校、

障害児教育諸学校、外国人学校

約250校 約1万5千人

年間90回の航海

##### ○複数校で乗船

大規模校は2回に分かれて乗船

平均乗船児童数：160名

（120～200名）

##### ○宿泊する

1泊2日（約30時間船での生活）

##### ○体験学習・「湖の子」環境学習を行う

##### ○母なる湖：（日本一大きい）琵琶湖が舞台



## 1 活動に関する全体計画等

### (1) 取組のねらい等

#### ① 教育方針

～ 夢を抱き、たくましさを持って、共に生きる人づくり ～

学校教育の一環として、学習船「うみのこ」を使い、母なる湖：琵琶湖を舞台に日常生活では得がたい宿泊体験型の教育を実施し、青少年に夢を育み、滋賀に新たな淡海文化を築いていく気概とたくましさを培い、人や自然と共に生きる人間形成に寄与する。

#### ② 意義と目的

◇たくましく生きる力の育成

環境に関わる力を育む（身近な地域の環境問題の解決に参加・行動していく力を育む）

健やかな心身を育む

（夢をもち、生き生きとした生活が送れるように、心をみがき、体を鍛える）

◇パートナーシップにより教育力を高める

地域との連携（学校・家庭・自治体・NPO他 広く本事業の啓発を図り、事業の理解を深めながら、連携して青少年健全育成の気運を高める）

多様な参画・参加（学習支援ボランティア他 専門的な知識や技能等を有する人たちの参画・参加を得ながら、本事業の充実発展を図る）

#### ③ 琵琶湖・淀川流域小学生交流航海事業の趣旨等

・淀川流域の小学生との交流学习を通じて、直接琵琶湖に触れて水環境を共に考え、学びあう活動を展開する。

・体験を通して琵琶湖に学び、地球規模の自然環境に対する認識を深めあうことをねらいとする。

### (2) 全体の計画等

○平成16年度の運航回数（1泊2日：91航海 1日11航海 計102航海）

そのうち、児童学習航海（小学5年生対象）1泊2日 90航海

○琵琶湖・淀川流域小学生交流航海事業

京都府・大阪府各3校、計6校が滋賀の小学校6校と交流

平成11年度から実施 3年間の交流

## 2 体験活動の実施状況（びわ湖フローティングスクールの教育内容）

### (1) びわ湖環境学習

【テーマ】琵琶湖に学ぶ 琵琶湖を通して学ぶ

【ねらい】琵琶湖への興味や関心を深め、今、琵琶湖がかかえている問題に気づいて、母なる湖・琵琶湖を大切に守っていく態度や心を育てる。

【主な活動】魚釣り、魚の観察、水草観察、水生生物観察、水鳥観察、ヨシ笛・水草のしおり作り、深層水調べ、透明度調べ、プランクトン観察、水の濁り調べ、えり漁・地引き網体験、外来魚調理、湖岸探検、琵琶湖展望・4つの島展望、カッター活動 等

### (2) ふれあい体験学習

【テーマ】郷土・人とふれあう 共に学びあい行動する

【ねらい】友だちや様々な人たちとのふれあい・交流すること、また、淡海文化にふれること等を通して、友だちとの友情や郷土を愛する心を育む。

【主な活動】 学校紹介、名刺交換、綱引き・ゲーム大会、色紙づくり、手旗、甲板みがき、ロープワーク、カッター活動、タウンウォークラリー、竹生島見学 等

(3) 「湖の子」 船内生活

【テーマ】 集団生活をおくり、くらしをみつめる。

【ねらい】 船内生活を通して、約束やルールを守ったり、互いに助け合い、協力しあったりして、規則正しく気持ちのよい生活を送り、社会的な態度や豊かな心を育む。

【主な活動】 乗船指導、オリエンテーション、避難訓練、出港見学、開・閉校式、船内見学、係活動、班活動、「湖の子」掃除 等

(4) 琵琶湖・淀川流域小学生交流航海 実施校について

- 平成 11～13 年度 草津市立 笠縫小学校と宇治市立 平盛小学校（京都）  
栗東町立 大宝小学校と島本町立 第一小学校（大阪）
- 平成 12～14 年度 大津市立 真野小学校と八幡市立 橋本小学校（京都）  
大津市立 長等小学校と高槻市立 三箇牧小学校（大阪）
- 平成 13～15 年度 守山市立 立入が丘小学校と大山崎町立 第二大山崎小学校（京都）  
守山市立 小津小学校と高槻市立 五領小学校（大阪）
- 平成 14～16 年度 栗東市立 葉山東小学校と宇治市立 大開小学校（京都）  
草津市立 山田小学校と島本町立 第四小学校（大阪）
- 平成 15～17 年度 大津市立 瀬田小学校と宇治田原町立 田原小学校（京都）  
大津市立 真野北小学校と高槻市立 南大冠小学校（大阪）
- 平成 16～18 年度 野洲町立 北野小学校と大山崎町立 大山崎小学（京都）  
守山市立 守山小学校と高槻市立 上牧小学校（大阪）
- 平成 17～19 年度の予定  
草津市立 渋川小学校 と京都府宇治市立 北槇島小学校（京都）  
栗東市立 治田小学校・県立 豊話学校と大阪府島本町立 第三小学校（大阪）

3 体験活動の評価・指導の改善・成果等

◇乗船後の引率教師による状況報告書より（平成 15 年度の評定集約）

\* 4 段階（4：たいへんよかった 3：よかった 2：あまりよくなかった 1：よくなかった）での評価では、次のような結果がでている。

- ・船内生活 平均 3. 1 点
- ・食事 平均 3. 2 点
- ・びわ湖環境学習（各項目の平均） 3. 0～3. 6 点
- ・交換・交流活動（各項目の平均） 3. 5～3. 7 点
- ・寄港地での活動（各項目の平均） 3. 2～3. 4 点

\* 主な感想からは、下のようなことが書かれてある。

- ・学校の枠をはずして、交流を深め友だちと力を合わせることの大切さや喜びを味わうことができた。
- ・湖上からびわ湖や滋賀を見つめることにより、今まで以上に自分たちのふるさとに愛着がもてたのではないだろうか。
- ・琵琶湖を守っていくために身近なところから気をつけていこうとする意識が定着してきている。

- ・共同生活により自主性をのばせた児童が多かったように思う。
- ・名刺を交換した後、年賀状を送るようである。
- ・学校生活における集団のマナーやルールを高めることができた。
- ・「友だちがいっぱいできた。うれしかった。」と話してくれ、何事にも積極的に取り組めるようになった。

◇児童への体験学習後の調査結果より（平成15年度）（22小学校で1757人に調査）

\*乗船前の関心・期待度や意欲、課題等の把握について

- ・初めて出会う友だちが70%、みんなと寝ることが53%で関心あり
- ・びわ湖環境学習に興味関心を持つは、95%

複数校乗船であることが児童にワクワクドキドキ感を引き出すと言える。

\*乗船中の集団生活の心構えやルール・約束ごとの実践度等の把握について

- ・3つの「あ」（あいさつ・あとしまつ・あんぜん）の意識化と実践、楽しい食事、友だちと交流、係の仕事、すべての項目でできた
- ・だいたいできたが85%以上
- ・特に、友だちとの交流が95%

約束については、生活の大切な部分。学校での事前指導や乗船時の指導の場面をさらに工夫・改善する必要がある。また、乗船前から友だちへの関心が高かった児童は、乗船後も友だちに関心を持って関わることができている。

\*フローティングスクールで学んだ満足度・充足度の実態把握について

- ・心に残るものとなったが、96%
- ・もう一度乗ってみたいが、90%

フローティングスクールの魅力を見事に感じ取っている。

#### 4 今後の課題と取組

友だちと協力しあい、共に学びあいながら、いきいきと活動に取り組む子どもたちに近づけるために、次の3つの課題があると考えている。

##### ①体験のための体験で終わらない

- ・びわ湖フローティングスクールでの体験学習の広がりや深まりをもたせる。

学校 → びわ湖フローティングスクール → 学校の一連のつながり

（フローティングでの活動で終わらないために、事前指導・事後指導の充実）

##### ②びわ湖環境学習の充実

- ・学習プログラムの教材開発  
新たな学習プログラムの作成、学習方法の工夫や改善
- ・びわ湖フローティングスクールでの体験のあり方を見直し  
限られた時間を生かし、じっくりと取り組む手だての工夫

##### ③学習活動支援の充実

- ・「湖の子」サポーターの参画  
きめ細かな指導体制、専門的な指導により、興味関心が高まり、意欲的・積極的に取組、活動の幅を広げる。

「オンリーワン」のさが体験活動  
佐賀県伊万里市立大坪小学校

学 校 の 概 要

- ① 学校規模
  - 学級数：17学級(内特殊学級1学級)
  - 児童数：539人
  - 教職員数：28人
  - 活動の対象学年：4年生・87人
- ② 体験活動の観点などからみた学校環境
  - 人口6万人の伊万里市の中心部、大坪町にあり、農村部と市街地に大別される。
  - 自然が多く、農村部では、伝統を重んじ、昔からの習慣や行事が地域郷土の芸能・文化として継承されている。
  - 「古伊万里」の積出港として、また、大川内山を中心とした「鍋島藩窯の里」として有名な陶磁器の生産地である。
- ③ 連絡先
  - 〒848-0021  
佐賀県伊万里市大坪町甲2501番地3
  - 電 話：0955-23-6148
  - F A X：0955-23-6149
  - <http://www2.saga-ed.jp/school/ootubo/>
  - Email:ootubo@school.city.imari.saga.jp

体 験 活 動 の 概 要

- ① 活動のねらい
  - 焼き物作りを通して、ふるさとへの理解を深め、そのよさを実感させる。
  - 郷土の伝統や文化を尊重し、継承していくこうとする態度を育成する。
- ② 活動内容と教育課程上の位置付け
  - 焼き物博士になろう  
(総合的な学習の時間85単位時間)
    - ・ 窯元の見学及び絵付け体験  
－ 6単位時間－
    - ・ 焼き物の形成作業体験  
－ 4単位時間－
    - ・ 焼き物の絵付け体験(1)  
－ 4単位時間－
    - ・ 焼き物の絵付け体験(2)  
－ 4単位時間－

1 活動に関する学校の全体計画

○ 活動のねらい

豊かな体験に裏付けられた知識・理解によって、児童の興味・関心はさらに高められ、自ら考え、判断し、新しい課題へ挑戦していく意欲も出てくるものと考え。児童はこれまで、総合的な学習の時間を核として、自ら問題を見付け、その解決をめざして活動してきたが、ともすれば、インタビュー、書籍、インターネット等を利用した調査活動とそのまとめに止まっていることも多かった。また、体験活動にしても、子どもなりの発想で挑戦しようとするものの、物的、時間的な制約等で、十分に納得できる活動が行われてきたとは言えないところもあった。

そこで、地域の教育環境を改めて見直し、地域との連携を一層強化してふるさとの豊かな自然や風土、先人の築いた歴史、守り伝えられた郷土の文化等を題材として、本物の体験活動を積極的に推進することによって、さらに広く郷土への理解を深め、ふるさとを愛する心と生涯学習の基礎となる豊かな人間性を育成していきたいと考え、全体計画を立て直した。

本年度の総合的な学習の時間の目標及び内容（中学年、郷土・文化領域）

大坪小学校の目標		総合的な学習で目指す児童像	
輝く子どもたちを求めて …いきいき楽しい学校づくり		<input type="radio"/> 自ら進んで自然や社会、人々とかかわる子ども <input type="radio"/> 目標に向かって根気強く取り組む子ども <input type="radio"/> 共生しようとする心と愛郷心をもつ子ども	
本校の総合的な学習の時間の目標		中学年目標	
ふるさとに目を向け、自然や社会、人々とかかわりを通して、各教科等で学習した知識や技能、態度の総合的発展を図り、自ら学ぶ力と共生の基礎、そして、自己の生き方について考える能力をはぐくむ。		自然や社会、人々とかかわりを通して、課題を見つけ、追求し、自分の生活の中に活かす能力をはぐくむ。	
領域	領域の目標	内 容	中学年の目標
郷土・文化	郷土の伝統や文化に関心を持ち、その大切さを理解し、それらを尊重し、継承する態度、新しい文化等を創造する資質や能力をはぐくむ。	ア 郷土の伝統や文化とかかわり、その素晴らしさや大切さの実感 イ 自分の生活と郷土の伝統や文化についての理解、その現状と問題点の認知 ウ 郷土の尊重、継承や新しい文化の創造への実践	ア 郷土の伝統や文化に進んで親しみ、その素晴らしさや大切さに気付く イ 郷土の伝統や文化の現状や問題点を知り、自分の生活とかかわりに気付く ウ 郷土の伝統や文化を大切に継承する活動や取組を知り、自分にできることを実践しようとする

「『オンリーワン』のさが体験活動支援事業」は、豊かな自然に恵まれ、様々な地場産業が盛んであるにもかかわらず、子どもたちの理解が不十分で、また、直接体験する機会等も乏しくなっていることから、佐賀ならではの、また、地域ならではの特色に応じた「オンリーワン」の体験活動を行うことにより、豊かな感性を育むとともに郷土への理解と愛着を深め、ふるさと佐賀のよさを実感し、誇りに思う気持ちを育てることを目的とした佐賀県独自の事業である。本校で掲げる中学年の「郷土・文化」領域における活動に大いに役立つものと考え、4年生の焼き物体験活動に取り組んだ。

○ 全体の指導計画

焼き物博士になろう 第4学年 総合的な学習の時間（MIRAI タイム） 全85時間





総合的な学習の時間の活動の流れ	活動の内容	時数	活動の場所	評価
出会う	○「古伊万里」って何？	1時間	学校	・断続的な自己評価 ・相互評価
醸成する	○焼き物ってふしぎなことがいろいろあるね。	2時間		
自己課題をもつ	○何を調べる ・焼き物ってどうやって作るの？ ・どんな歴史があるのだろうか？	2時間		
課題追究	○調べる、情報を集める	12時間	大川内山伝統産業会館 飛龍窯(武雄市)	・作品評価 ・行動観察
ものづくり体験活動	○私も作ってみたい！！窯元に行ってみよう ・聞き取り調査、見学、焼き物作り体験	20時間		
中間報告会	○これまでに分かったことを紹介し、お互いの作品の鑑賞会をしよう	5時間	学校	・相互評価
修正・再挑戦	○焼き物の特徴について調べよう	4時間	学校	・行動観察
	・唐津焼、伊万里焼、大川内焼はどこが違うの？	6時間		
成果発表	○学習成果、体験活動のまとめ	6時間	学校	・作品評価
情報発信	○ホームページ製作「わたしたち焼き物博士」	16時間		
反省会・振り返り	○学習のまとめとしての情報の発信	6時間		

## 2 活動の実際

### ○ 事前指導

4年生の児童は、1学期の間、各自で持ち寄った窯元の案内パンフレットや資料、インターネット等を利用しての調査活動で焼き物の歴史や作り方などを調べた。その成果発表会等を通して、「自分の手で焼き物を作ってみよう」という意欲が高まってきた。

### ○ 焼き物作り体験活動（体験活動前後の計画及び振り返り・反省などの時間は除く）

時間	学 習 活 動	
6	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     窯元をたずねてみよう                      ・焼き物の歴史について ・窯元工場見学                      ・歴史公園散策 ・絵付け体験                 </div> <p>活動場所：大川内山伝統産業会館                      活動日：平成16年10月19日（火）                      活動費等：事業費から</p> <p>○ 窯元の見学では、一人一人が自分の課題をもって、訪ねることになった。学校での調べ活動とは違い、ピンと張りつめた雰囲気の中での活動になり、子どもたちの表情も真剣そのものであった。</p> <p>焼き物作りのたくさんの工程に改めて驚くとともに、「ろくろ三年、土こね三年」と言われる技術の習得の難しさを知り、ふるさとの伝統工芸に対する誇りも感じていた。</p> <p>焼き物の形成作業の見学では、職人さんが、ろくろを使いみるみる間に壺の形を作り上げていく様子に、思わず感嘆の声が上がっていた。子どもたちの中には、「自分にも簡単にできそう」と感じた子どももいたようだが、見学段階ではそれも大いに認めることとした。この日は、素焼きのマグカップへの絵付け体験も行った。</p>	 
4	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     土練りから体験してみよう                      ・土練り ・形成作業                 </div> <p>活動場所：武内町飛龍窯（武雄市の運営）                      活動日：平成16年10月25日（月）                      活動費等：事業費から</p> <p>○ 土こねから形成まで行った。職人さんから説明を受けた後、さっそく取り組んだが、かなりの力作業で思うようにいかないようだった。練る段階で空気を含ませないということが難しかったようだった。自分がイメージした形にするのはかなり難しかったようで、改めて、職人さんの技のすばらしさを感じていた。</p>	
4	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     自分の素焼きに絵付けをしよう                      ・前回作った自分の素焼きに、自分の好きな絵付けをする                 </div> <p>活動場所：武内町飛龍窯（武雄市の運営）                      活動日：平成16年11月29日（月）                      活動費等：事業費から</p> <p>○ 自分のオリジナルの焼き物ができるということで、活動の前から、わくわくしている様子だった。絵付け体験は前回も行っていたが、自分の素焼きに絵を付けることには特別な思い入れがあるようで、活動する子どもの表情は一段と真剣であった。</p>	
4	<p>○ 伊万里焼の特ちょうを調べ、その特ちょうを生かした絵付けをしてみよう</p>	<p>飛龍窯に協力依頼                      ただし、作業は学校で                      活動日：検討中                      活動費等：事業費から</p>



### ○ 事後指導

郷土愛を育てていくためには、今回実施した体験活動によって得られた知識や意欲・関心の高まりを、自らが学ぶ意欲をもってふるさつを見つめる姿勢へとさらに高めていくことが必要である。そのために、ホームページでの情報発信、新たな課題としての焼き物作りへの再挑戦、そして、ふるさと伊万里のよさを他にも求める活動へつないでいくことにしている。

### 3 体験活動の実施体制

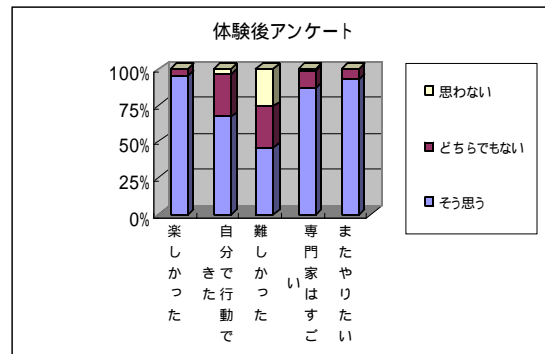
- ・ 4年生担任、校長、教頭、事務長、教務主任の7名からなる委員会を組織した。委員会においては、地域の特色を生かし、ねらいに沿った活動であるのか協議し、実施計画案作成と実施を4年生担任を中心に行った。中学校との連携に関する連絡・調整を教務主任が担当した。
- ・ 体験活動の受入に関しては、本市が焼き物の里として、窯業の振興に熱心な取組がなされており、体験活動の意義を十分に理解していただき、関係団体に快く受け入れてもらえた。今後は、校区内での人材活用なども考えていきたい。

### 4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

本校では、総合的な学習の時間の評価として、疑問、願い、感じたこと、まとめたことに対する継続的な自己評価を記録していく「ポートフォリオの機能を生かした評価」を行っている。今回は体験活動の前に「期待度と意欲」を、活動後に「満足度と感想」のアンケート形式の評価も行った。教師側の評価とするとともに、児童自身が変容をとらえるための資料としてもそれを用いて、体験活動の振り返りを行った。「ゆう菓をかけると、なぜつるつるになるの?」「他の市や県の焼き物と比べてみたい。」等の記述が多く見られるなど、体験活動から感じたことを次の新たな課題として捉えている児童も多かった。今後の活動において、さらに追究させていきたい。

### 5 活動の成果と課題

体験後のアンケート結果は右に示すとおりである。楽しかったという答えが多かったことはいままでの間でもないが、自分で考えて行動できたと答えた児童が7割近くに上るなど、積極的なかわりが見られたことが分かる。また、感想の多くに、「自分特製の焼き物ができてよかった。」「もっともっ」といような物を作って焼き物名人になりたい。」



が見られるなど、焼き物に対する親しみが増していることが分かった。さらに、「私は伊万里が好きです。とてもきれいな焼き物があるから。だから他の町の人にも見に来て欲しいです。」「焼き物作りは大変だけど、楽しいです。おくが深いです。焼き物のことをたくさんの人に知ってほしいので、ホームページ作りをがんばります。」など、焼き物作りに誇りを持つと同時に、それを多くの人に広める活動へと意欲を持つ児童も出てきている。活動のねらいに迫ることができているものと考えられる。

専門的知識が必要なことや活動の場が特殊なことから、今回は、特に家庭との連携は取らなかったが、活動への協力や情報の提供などを広く家庭へ呼びかけることで、新たな方法が見いだされたかもしれない。体験活動を学校だけの活動に終わらせないためにも、今後、家庭・地域との密着した取組が行えるよう、全体計画等をさらに見直していきたい。